大学院派遣研修での研究内容の概要

所　属　校	多摩市立大松台小学校	氏　　名	野　口　　徹
派遣大学院	鳴門教育大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻・総合学習開発コース
研究テーマ	**学びの総合化をうながす学校カリキュラムの開発** －クロス・カリキュラー・アプローチの考えを基盤に－		

1　研究の目的（学校における現状，課題，課題を解決するための研究の位置づけ）

2003 年の学習指導要領一部改正によって，各学校において全教育活動のバランスがとれたカリキュラム開発を行っていくことが強く望まれている。ここで問われているのは，子どもが「主体的」に様々な学びを相互に関連させ，総合化していく「経験」「履歴」としてのカリキュラムと，このような学びを子どもにうながすために教師が「主体的」に学校カリキュラムを開発する「計画」「実践」としてのカリキュラムとのバランスである。

各学校にはこれを行うための力量と方略が求められるが，しかし，これらは，バランスのとれたカリキュラム開発を実際に成し遂げることからしか獲得することができない，という大きなジレンマが存在している。その意味からも，学校カリキュラム開発には何等かのモデルが必要となってくる。

そこで，学校カリキュラム開発における先達としての歴史を有する，英国の「クロス・カリキュラー・アプローチ」を基盤に置き，その日本型展開及び拡張を図ることを検討していく。そして，そこから得られた示唆により，今後の学校現場における学校カリキュラム開発に有効なモデルを提案する。これらを本研究の目的とした。

2　研究内容（方法・経緯・内容等）

（手順と方法）

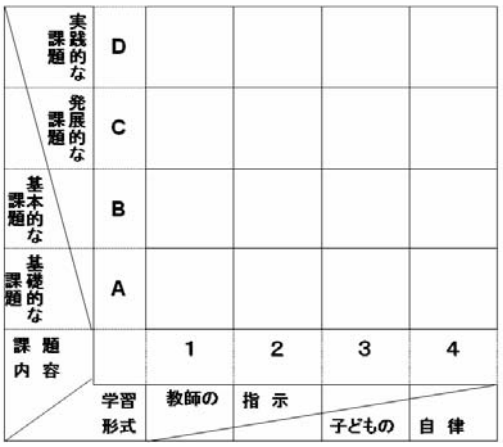
①カリキュラム開発に関する文献及び先行研究から，バランスのとれたカリキュラムを開発するための基本的な考え方をまとめ，学校カリキュラムの構造化を図り，それを活用することで具体的な開発手順を探る。

②英国と日本において取り組まれている，様々なクロス・カリキュラー・アプローチによる実践を調査分析し，学校カリキュラムの構造モデルの具体的な展開例をとりあげ，その有効性を検証する。

（研究内容）

1　バランスのとれたカリキュラム開発

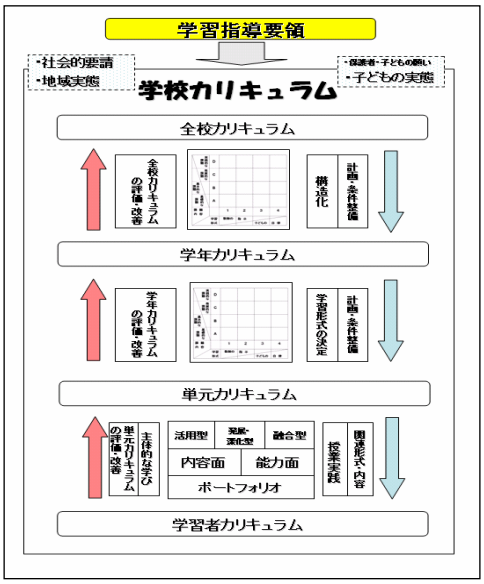
バランスのとれたカリキュラムを学校が開発するための方法論としては「工学的アプローチ」と「羅生門的アプローチ」の二つが挙げられている。さらに，カリキュラムには，その性格によって区別される，様々な種類がある。これらは，これまでの歴史の中で背反するものとして捉えられてきたが，バランスのとれたカリキュラムを開発するときには，むしろこれらを目的に応じて組み合わせていくことが望まれる。つまり，クロス・カリキュラー・アプローチである。そこで，クロス・カリキュラー・アプローチに関して，英国において開発された歴史的背景や理論，そして実践例を分析した。それにより，このアプローチが子どもの社会的な発達を促すことを目指し，様々なタイプのカリキュラムをバランスよく組み合わせることを可能とするものであることが明らかとなった。それにより，このクロス・カリキュラー・アプローチを，日本においても機能させるべく，モデル化を図った。



図表１　学習課題と学習形式によるマトリクス

経験的なカリキュラムと教科的なカリキュラムのバランス，教師の主導性と子どもの主体性のバランス，これらを子どもの実態に適合させてカリキュラムを開発することから，この取組が開始される。そのために，「学習課題と学習形式のマトリクス」を用いることにする（図表１）。そこに期待する「子どもの姿」を記述し，それを基盤として学校カリキュラムを開発していくのである。

さらに，学校カリキュラムを四層構造に区分し，全校カリキュラム・学年カリキュラム・単元カリキュラム・学習者カリキュラムと設定する。これらは，それぞれの層において異なる役割を果たすことが期待される。先の三層が教師によって開発されるカリキュラムであり，最後の学習者カリキュラムは子どもの学習履歴のカリキュラムである。これらをバランスよく配置することから，日本型のクロス・カリキュラー・アプローチの実践が期待されることになる（図表２）。



図表２　学校カリキュラムの四層構造

２　クロス・カリキュラー・アプローチのケーススタディ

日本におけるクロス・カリキュラー・アプローチによる実践例として，３つの学校を対象として調査・分析を行った。その結果から，これらの学校に共通する点が見えてきた。それは，複数年に渡る学校カリキュラムの開発，教師の主導性と子どもの主体性とのバランスの重視，問題解決型の学習を核としたカリキュラム構成，そして，学習者カリキュラムの特徴的な取組である。特に，吉野町立吉野中学校の「仲吉ノート」は，子ども自らが学びを意味付け紡ぎ合わせる，「知の総合化」の実践であり，注目に値する。これらの取組からも，クロス・カリキュラー・アプローチの日本型モデルが機能することは十分に可能となる。

３　研究成果と課題

ここまで見てきたことからもわかるとおり，クロス・カリキュラー・アプローチを基盤とした，バランスのとれた学校カリキュラムを開発するには，複数年にわたる学校カリキュラム開発を見越した上での取組が必要不可欠である。そこで重要となるのが，記述的な学校カリキュラムの蓄積が，各学校において十分になされることである。そして，それが毎年のカリキュラム開発において有効に機能することも必要となる。自校で開発したカリキュラムを，継続的に開発していくシステムが設定されることにより，教師一人ひとりの職能開発へと繋がることも併せて期待される。

これらについて具体的に取り組むには，一つとして校内の研修計画の中にカリキュラム開発を位置づけ，日ごろの教育実践において意識的に各教師が取り組むような体制を作ることが求められ，もう一つとしては，校内に開発されたカリキュラムを管理・蓄積するための設備『カリキュラム・センター』を整えることが求められる。まず校内研修においては，前年度の教育課題や子どもの実態等を洗い出し，そこから導かれる全校カリキュラムの試案を作成することを年度当初の作業に入れることになろう。それを基にして各学年および各学級での実践計画が立てられることになる。これらを一人ひとりの教師が互いに意識しあいながら授業を行い，そこでの実践内容を子どもの姿から反省的に振り返ることでそれぞれのカリキュラムの評価を行うことになる。これらを集積することで学校全体としてのカリキュラムの動向を各教師が共有することになるであろう。

さらに，それらをカリキュラム・センターに管理し，学校としてのカリキュラム開発の資料とすることをねらう。システムとしてデジタル・コンテンツとしてカリキュラムの記録を残し，可視化することで，より実践において有効に活用されることを促すことと思われる。データベース型グループウェア等を導入することから，これらの活動はより簡便になることが期待される。そこから，一人ひとりの教師が自身の実践の意味をとらえることも促し，高い意識をもった教師集団へと移行していくことも期待されるであろう。

大学院派遣研修での研究内容の概要

所　属　校	多摩市立大松台小学校	氏　　名	野　口　　徹
派遣大学院	鳴門教育大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻・総合学習開発コース
研究テーマ	**学びの総合化をうながす学校カリキュラムの開発** －クロス・カリキュラー・アプローチの考えを基盤に－		

1　所属校での成果活用

第２学年の年間指導計画(「学年カリキュラム」)を作成するにあたり，児童の実態や前年度の指導実績等を考慮し，さらに，学校教育目標に沿った形で，「学習課題と学習形式のマトリクス」を形成し，さらに，「学年カリキュラム」を立てた（図１参照)。これを基にして，生活科を核とした単元構成（「単元カリキュラム」）を考えたり，各週に立てる週案の柱として活用した。実際の指導場面では，児童の学習状況をとらえて記録する際に，このマトリクスと直結する形式を意識すると共に，児童には，「ポートフォリオ」によって自身の「学習者カリキュラム」を形成させた。また，保護者と連携し，子どもの成長の様子をポートフォリオの活用を通して評価してもらうことにも取り組んでいる。これらの様々なカリキュラムを蓄積した上で，「マトリクス」の内容に付記することにし，次年度以降のカリキュラムを立てる際に活用可能な記録として残すことに取り組んでいる。これにより，学校カリキュラムの充実に寄与することが出来ると考えている。

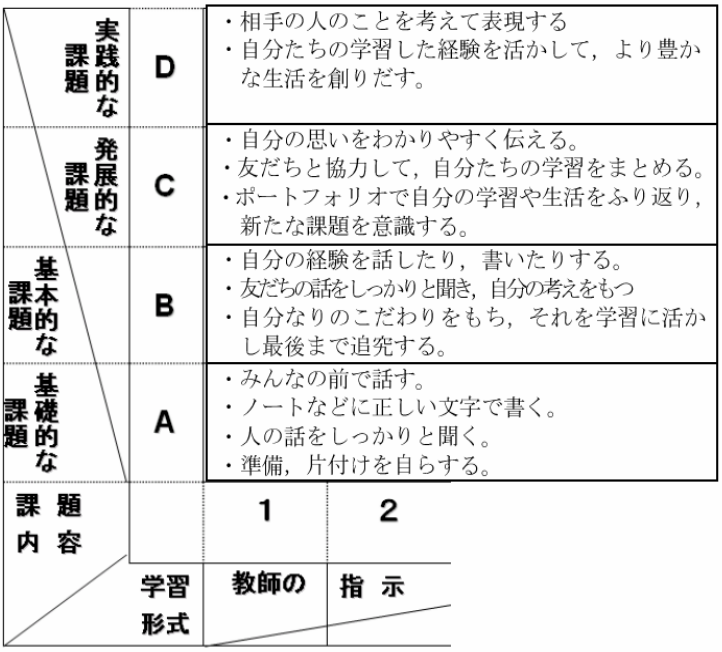


図 1　第２学年マトリクス

2　委員会・研修会での成果活用

○平成 17 年 10 月 28 日　「平成 17 年度大学院派遣研修事前研修会」（於：東京都教職員研修センター）における発表
（参加対象者：平成 18 年度第 14 条大学院派遣予定研修者及び新教育大学院派遣予定研修者　参加数：20 名）
『大学院における研修の実際』鳴門教育大学大学院で研修した内容についての発表

○平成 17 年 11 月 9 日，多摩市教育研究会「生活総合部会」11 月例会における発表
（参加対象者：多摩市教育研究会生活総合部員　参加数：6 名）
修士論文の内容と今年度の取組との連関についての発表

○平成 17 年 8 月日　高知市教育研究会教科外部会（教育評価部会）夏季研修会　講師
『学びの総合化をうながす学校カリキュラムを開発するために』修士論文の内容に関する講演
（参加対象者：高知市教育研究会教育評価部員　参加数：約 40 名）

2 委員会・研修会での成果活用	○平成 17 年度　福岡市立赤坂小学校　校内研究評価者 『子どもが心豊かに自らの学びをつくる学習（3 年次） ～聴き合い活動とポートフォリオを生かした学習の展開を通して～』 赤坂小学校の校内研究（カリキュラム開発に関する研究）の意義について，評価し，赤坂小学校が刊行する書籍に寄稿した。
3 成果を生かした研究授業等	○平成 17 年 10 月 12 日　多摩市教育研究会「生活総合部会」研究授業 単元名「遠くの友だちと知り合おう」 児童や地域の実態を鑑みて，年間の指導計画の中に，「人との関わり」を重点化した生活を核に据え，生活科と他教科等との関連性を図った実践を行った。具体的には，一学期の生活科の単元「まちたんけん」を発展させ，また，道徳の「まちのひみつわかったよ」国語「お手紙」などとの関連を図り，単元開発を行った。「遠くの友だち」とは，徳島県池田郡池田町立池田小学校の 2 年生である。彼らとは，一学期から道徳および生活科の中で，互いの様子について手紙などを通じて交流をしてきた。この単元では，TV 会議システムを活用し，自分たちの「まちたんけん」でお世話になった人を紹介する，ことを主たる内容としている。先に示したように，生活科と他教科等との内容面・技能面での関連を図り，また，児童の内部における経験の統合を図ることを，この単元開発の大きなねらいとしている。「まちたんけん」でお世話になった人に手紙を書いて参加を交渉したり，インタビューを試みたりするなどの活動を通して，これらのねらいは十分に達成することができたと考えている。この単元を開発し，実践したことから，単元カリキュラムの充実（生活科と他教科等との関連），学習者カリキュラムの形成（「手紙」やポートフォリオによる評価）などを行うことが出来た。この単元の記録は，単元カリキュラムとして蓄積され，次年度に申し送ることにしている。
4 今後の活用計画等	○勤務校における教育課程を作成するにあたり，研修で得た知見を活かし，バランスのとれた学校カリキュラムの開発に寄与することに取り組んでいきたい。 ○また，東京都および多摩市内の研究会等においても，自身の知見を伝えていくことにも取り組みたいと考える。 ○さらに，種々の学会・研究会等にも積極的に参加し，研修内容の深化を目指すとともに，より広範への伝播を心がけていく。

高知市教育研究会　夏季研修会　配付資料　　2005.8.23

東京都多摩市立大松台小学校
野口　徹

1　問題の所在

①中央教育審議会答申に示された総合的な学習の時間の課題

2003 年 12 月に学習指導要領が一部改正された。この改正は，2003 年 10 月の，中央教育審議会（以下中教審）の「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」という答申を受けたことによる。この答申では，第 2 章において「新学習指導要領のねらいの一層の実現を図るための具体的な課題等」[1]を挙げている。ここに挙げられた五つの課題の中に「**（３）総合的な学習の時間の一層の充実**」がある。その内容としては，総合的な学習の時間の導入による効果と，教師が総合的な学習の時間に実践をする上で感じている課題及び学校の抱える課題について次のように言及している。

(1) 総合的な学習の時間導入による多大なる成果
(2) 教師の総合的な学習の時間を実践する力量不足
(3) 学校における総合的な学習の時間のカリキュラム開発力の不足

これを受けて，文部科学省（以下文科省）は，学習指導要領の一部改正を行ったのである。

②一部改正された学習指導要領における総合的な学習の時間

今回の学習指導要領の一部改正の内容として，総合的な学習の時間には新たなねらいなどが付加された。「**各教科，道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け，学習や生活において生かし，それらが総合的に働くようにすること**」である。これは，子どもに自らの学びを「総合化」し得る能力を獲得させることを意味している。つまり，子どもが学びの「主体」となるものである。同時に、各教師は，これらのねらいを達成するために総合的な学習の時間に「適切な指導」を行うことが必須事項になったのであり，子どもの学びに応じて様々な「関連」を図って指導することに配慮した指導計画，つまり学校カリキュラムを作成することになった。子どもの学びの関連付けを教師が「主体」なって行うことを示している。つまり，ここには二つの「主体」による二つの「総合化」する取組が存在している，というパラドクスが見られる。一つは，教師が「主体」となり，子どもの学習効果を考えた計画段階での「総合化」であり，もう一つは子どもが「主体」となって自らの学習の経験を「総合化」するものである。

③クロス・カリキュラー・アプローチの必要性

ここでそのモデルになると考えられるのが「クロス･カリキュラー・アプローチ」と呼ばれる方法である。これは，英国で 1988 年にナショナル･カリキュラムが導入された際に，教育課程審議会National Curriculum Council（以下NCC）が発行していた年次報告書において示唆したアプローチのことであり，磯崎（1996）は，これを「伝統的教科領域の枠組みを越えて横断的かつ柔軟性をもって行う教授・学習（活動）であり，基本的には，幅広く調和のとれたカリキュラムの達成にとって必要な要素」[2]と定義している。

日本においてはこのアプローチについて，「クロス･カリキュラム」という呼称で 90 年代の中盤に紹介されている。特に，総合的な学習の時間が導入されるまでは，総合的な学習に取り組むための一つの形式として，実践も数多くなされてはきたが，それらについて高階（1996）は，「イギリスのそれを単純に導入したわけではなく，教科・道徳・特別活動を横断的・総合的に構成したカリキュラムが想定されていて，いわば国産的な印象が強い。現在わが国で言われているクロス･カリキュラムの発想もわが国固有のものと考えてよい」[3]と指摘する。また、田中（2000）は，クロス・カリキュラー・アプローチは『子どもを「権利行使の主体」として育てるために役立てることが必要である』[4]とし，さらに「子どものニーズに応えるように学校教育を再構

---

[1]文部科学省『中央教育審議会答申：初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について』2003.10.7 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/03100701.htm　2005.1.15
[2] 磯崎哲夫「英国におけるクロス・カリキュラムとその運営」野上智行編『「クロスカリキュラム」理論と方法』明治図書　1996　p.108
[3] 高階玲治「カリキュラム作成のむずかしさと融合型・相関型の課題をどう超えるか」高階玲治編『「総合的な学習」の実践No.6「総合的な学習」の展開と技術』教育開発研究所　1998　p.33
[4] 田中統治　「クロスカリキュラムの原理と方法」谷川彰英（他）編『21 世紀の教育と子どもたち２　学校教育の再構築をめざして』東

成する道につらなっている」[5]と指摘し，このアプローチにより子どもが自らカリキュラムを紡ぎ合わせていく主体としての部分を期待している。

これらを総合的に見た場合に，日本の学校カリキュラム開発において，クロス･カリキュラー･アプローチのもつ意味は極めて大きいものと言える。つまり，子どもの主体的に自らの学びの経験を総合化することをうながすために，また，それを実践していく上で，教師にも主体的で総合的な学校カリキュラム開発をうながすという，二つの学びを包含したアプローチであると考えられるからである。

2 バランスのとれたカリキュラム開発

①カリキュラム開発の理論から

学校においてカリキュラムを開発するにあたり，アトキンAtkin, J.M.が示した「工学的アプローチ」と「羅生門的アプローチ」という二つの対照的なアプローチが参考になる。中井（2001）はこの二つを『「行動目標―評価」による，従来の工学的なカリキュラム開発の方法』（工学的アプローチ）と「授業実践を中心とする，教師の複雑な実践活動に基づくカリキュラム開発の方法」（羅生門的アプローチ）と概括している[6]。これらの二つのアプローチは，現行学習指導要領によって各学校に求められているカリキュラム開発の方向性と，その特性において重なりを見せている。

つまり，従来からの学校のカリキュラムが「工学的アプローチ」の構造であり，こちらが一つの柱になると同時に，必要とされる視点においては「羅生門的アプローチ」の取組がなされる，という現実的な視点が見えてくるわけである。これらをまとめてみると，学校カリキュラム開発においては両アプローチの組み合わせが不可欠であることが明らかになる。言うなれば，カリキュラムを目標と子どもの学びに応じて巧みにクロスさせるアプローチが求められるのである。

②クロス・カリキュラー・アプローチ

クロス・カリキュラー・アプローチは，前述のように英国にその端を発するものである。それが生まれた第二次世界大戦後の英国の教育的背景を概括すると，インフォーマル・エデュケーションが代表する子どもの存在自体を中心においたカリキュラムの開発と，それを基本と位置付けながらも社会的要請に学校がどのように現実的に対応するべきか，という方向性，さらには，文化的遺産の継承を図る機関・装置としての従来型の学校，といった様々な要素が交互に出現することで，「教育の目的とは何か」という究極の問題を実証的に解き明かそうとする，ダイナミックな歴史的展開を見ることができる。つまり，クロス・カリキュラー・アプローチは，単純なる「系統主義か経験主義か」という二項対立的論争の後にそれらの折衷案として生まれてきたのではなく，また，単に教科同士の内容や学習方法などを教師が意図的に繋ぎ合わせ，子どもに経験させるというレベルのものでもない。インフォーマル・エデュケーションの理想は追求しながらも，より現実的な対応を行う方法論として生まれたのがクロス・カリキュラー・アプローチである。

このクロス・カリキュラー・アプローチの理論的な背景としては，寺西（1998）が，「社会的カリキュラム（social curriculum）」である，という見解を示している[7]。さらに，ここで扱われるテーマは，『「社会的人間」としての成長，つまり，教育の目標の大きな一つである「社会的発達」にかかわるものである』[8]としている。そして，このアプローチから獲得を目指すべき力について，「社会的発達課題も社会への適応や文化の伝達・授受を中心としたものではない。社会に積極的に参加し，変革の主体として社会を変えていく能力である」[9]と述べている。つまり，クロス・カリキュラー・アプローチは，子どもが社会で自分自身を生かしていける力，それも適応するだけでなく実践者として社会に参画する力の獲得を後押しすることが期待されているものである。また，クロス・カリキュラー・アプローチが子どもの中に統合させる対象については，寺西は「内容・

京書籍2000　p.174
[5] 同上
[6] 中井孝章「学校学習の転換とカリキュラム開発の現在」山口満編著『現代カリキュラム研究』学文社 2001　p.328
[7] 寺西和子「イギリスの「クロスカリキュラム」の検討―その社会的性格と構成論から―」『愛知教育大学研究報告（教育科学編）』第47巻1998　p.23
[8] 同上p.24
[9] 同上p.25
[10] 寺西　前掲論文(7) p .27
[11] Morrison,K. *Implementing Cross-Curricular Themes* , London David Fulton Publishers 1994 pp.33-34;p.80
[12] ibid p.92
[13] ibid

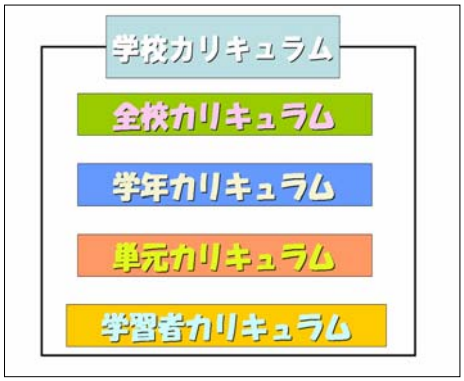
領域の関連・総合化」と「経験・方法の総合化」の二つの軸がカリキュラムには求められているが，ただ「内容」の関連を図ってもこれらを子ども自身が主体となって関連ネットワーク化をはかることができるとは限らず，「方法」を構造化することから子どもの学習経験の統合をはかることとのバランスが基本になる，と述べている[10]。ここで寺西が指摘していることは，教師がカリキュラム間の関連を図る際に内容的な関連に重きを置いてカリキュラム開発を行い，実践することが，そのまま子どもの中での有意味な統合を促したことと同義であるか，それを疑ってみる視点の必要性であろう。つまり，子どもが自らの学びを総合化することがこのアプローチの本質だからである。

モリソンMorrison,K.(1994)は，こういったクロス・カリキュラー・アプローチの性格をおさえた上で，具体的な内容の立案方法と，授業展開における学習の方法について「内容作成プラン」と「学習形態別プラン」を提案している[11]。モリソンは，これらのプランについて，「学校は一つの方法論にしがみつくよりも，むしろ目標に応じて組み合わせて使うべきである」[12]とし，このように取り組むことが，「クロス・カリキュラー・アプローチの主たる，そして不可避な特徴である」[13]と述べている。

これらのことから，クロス・カリキュラー・アプローチがその理論においても方法論においても，子どもの主体的な学びを促すことを志向し，目標と子どもの学びに応じてカリキュラムをクロスさせようとするものあることがわかる。つまり、現在の日本の教育課題の一つである，教科と総合的な学習の時間とを関連させたバランスのとれたカリキュラムを開発することを，各学校が実際に行っていくには有効な手立てである。

3　日本型クロス･カリキュラー･アプローチ

日本型のクロス・カリキュラー・アプローチのモデルを以下に提案する。



図表１　学校カリキュラム内の四層構造

①学校カリキュラム

学校カリキュラムには多層性があり，それぞれのレベルにおいて異なる役割を果たすことが求められる。それは，学校全体の計画を表す「全校カリキュラム」，学年ごとの年間計画を表す「学年カリキュラム」，単元レベルの計画を表す「単元カリキュラム」，そして，子ども自身の学習の履歴である「学習者カリキュラム」の四層構造である（図表１）。

②全校カリキュラム

この構造を意識して，全校カリキュラムを計画することになる。この中に，経験的なカリキュラムと教科的なカリキュラムのバランス，教師の主導性と子どもの主体性のバランス。これらを子どもの実態に適合させ組み合わせたカリキュラムを開発することが求められる。そのために，「学習課題と学習形式のマトリクス」を用いることにする（図表２）。これは，縦軸に学習課題の内容を示し，横軸に学習の形式を示している。

③学年カリキュラム

全校カリキュラムを受けて，また，前年度の実績も参考にしながら，各学年の１年間の指導計画となる，学年カリキュラムを作成することになる。問題解決型学習を核として，教科等の学習と総合的な学習の時間の学習との関連を図った計画の作成をすることになるが，そのときにも，まずは「学習課題と学習形式によるマトリクス」の学年版を作成することが必要である。

課題内容		1	2	3	4
実践的な課題	D				
発展的な課題	C				
基本的な課題	B				
基礎的な課題	A				
学習形式		教師の	指示	子どもの	自律

図表2学習課題と学習形式によるマトリクス

④単元カリキュラム

続いて，単元カリキュラムの作成である。学年カリキュラムに示された経験単元に，子どもの学習状況などを考慮して，その単元において教科等の学習と総合的な学習の時間の学習との関連のタイプを決定することになる。その後，内容面と能力面の関連についても，その関連タイプに応じた形式でどのように関連するのか，また，どのような方向性に関連していくのか，といったことなどを決定する。

⑤学習者カリキュラム

単元カリキュラムにおいて設定された形式により，学習者カリキュラムが取り組まれることになる。学習者カリキュラムは，主にポートフォリオのような形式になると思われるが，子どもが自らの学習の意味を捉える活動が必要となる。そして，子どもにとっては自己評価活動となるが，同時に教師にとっては，子どもの姿を評価することから，単元カリキュラムの評価をすることとなり，そこから得た情報から新たな支援内容や，カリキュラムの修正・改善事項を決定していく活動となるまた，これにより子どもの主体的な学びが促されることが期待される。

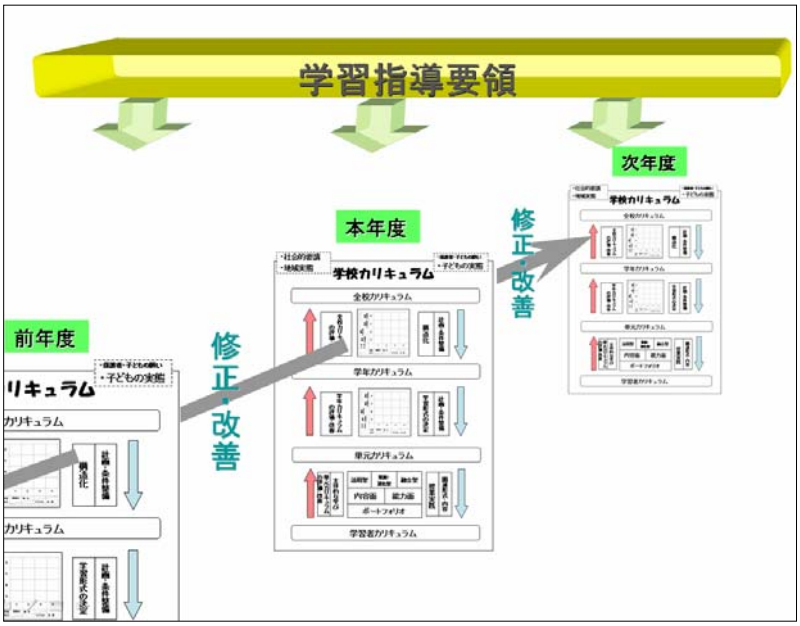
⑥単元終了後・学年末の評価の分析

単元が終了したときには，単元カリキュラムの評価内容が蓄積されている。これらを総括的に分析することが必要になる。これを 1 年間のそれぞれの単元終了後に行うことが，そのまま学年カリキュラムの評価になり，改善点なども合わせて記述することで次年度のカリキュラムの資料となる。これらが全学年揃うことで，全校カリキュラムの評価となり，改善点なども合わせて記述することで次年度のカリキュラムの資料となる。マトリクスについては，各学年に蓄積された修正内容から，次年度用のマトリクスを作成しておくことを行う。

⑦複数年にわたる継続的な学校カリキュラム開発

１年間のサイクルで開発した学校カリキュラムは，次年度以降にも修正・改善がなされながら，継続的に開発がなされていく。毎年行われるカリキュラム開発の記述が次年度に活用され，また，その次年度に引き継がれていくことになる。「羅生門的アプローチ」によるものである。

複数年にわたり，学校カリキュラムが開発されることで，学校の特色がカリキュラムに色濃く現れる。学校カリキュラムがモデル化された状態である。教師が異動などにより入れ替わっていても，学校のカリキュラム開発力は維持されることになる。このような状態を作り出すシステムが機能するためにも，学校カリキュラムの記録には，格段の配慮が重要となる。



多摩市教育研究会　生活・総合研究部会　10 月定例会　授業提案

平成 17 年１０月１２日

多摩市立大松台小学校

野口　徹

１．単元名

生活科「遠くの友だちと知り合おう」

２．今年度部会　研究主題

生きる力をはぐくむ楽しい授業づくり

３．単元の目標

◎遠くにすんでいる 2 年生の友だちと出会い，伝え合うことから，自分たちの生活をふり返り，その良さを考えるとともに，伝え合うことの楽しさを実感する。

【評価規準】

（１）**活動や体験についての思考・表現**

・自分たちの生活している「まち」を見直し，どんな人を紹介することが一番自分たちの「まち」の様子を表しているのか考える。

・自分たちの考えたことをどんな方法で池田小学校の人に伝えることが，より効果的であるか考え，準備し，実行する。

（２）**身近な環境や自分自身への気付き**

・遠くの友だちに，自分たちの生活している「まち」について紹介することから，自分たちの「まち」を見直し，その良さなどに気付く。

（３）**生活への関心・意欲・態度**

・友だちと協力して，よい関わりを作り上げていこうとする。

４．単元について

（１）児童の実態について

大松台小学校は，家庭環境が比較的安定している児童が多いため，学習指導面・生活指導面で問題となるのは学習遅進や非行等ではなく，学習障害やＡＤＨＤ，高機能自閉症などの児童への特別支援教育に関するものが多い。大多数の児童に，ある程度以上の学習定着を図るのは困難なことではない。

しかし，実際の児童の様子を見た場合に，「指示待ち傾向」が強く，教師の指示無しでは行動できない児童が目立つ，と言うことがある。高学年であっても自分で判断し，解決する能力に欠けるなど「自立」していない児童が圧倒的に多い。また，コミュニケーションを適切に，かつ充分に行うことが出来ない，公共心に欠ける，規範意識が低い，生活的な技能が定着していないなど，一般的に言われる現代の子どもの問題点がそのままあてはまるように見受けられる実態も特徴的である。素直で，大人の言うことはやろ

うする児童が多いことから，管理面では容易であるが，これからの時代を生き抜いていくための人材育成の面から見た場合に，小さくは無い問題点を抱えていると言える。

今年度は，校内研究のテーマとして「伝え合おう，かかわり合おう」という題を掲げ，国語を対象として取り組みを開始している。児童のコミュニケーションに関わる意識の実態調査を行い，そこに現れる姿と教師の願いとの間に生まれるギャップをどのように埋めていくのかを模索しているところである。

2年生の児童は，4月当初には先に示した本校児童の傾向が同じように見られ，特に，自身の判断を教師に全面的に依存している児童が多いことが目に付いた。また，本校では毎年学級編成を変更することにしているため，児童同士も互いに名前が分からないものが多数いるなど打ち解けた関係ではなかった。そこで，1学期より，学級経営の中にいくつかの手立て（後述）を講じ，継続的に取り組んできている。これにより，多少は改善する方向に来ているところである。

（２）単元設定の理由

①年間の取組に対する基本的な考え

上記のような実態をもつ児童であるので，今年度の2年生の年間指導計画を構想するあたり，子どもの生活経験を核に据えた問題解決型の学習を仕組んでいくことをベースに置くことにした。それは，児童が自身の生活そのものを学習対象と捉えさせることにより，そこに現れてくる諸問題を児童が見つけ，児童相互の関わりの中で解決する活動を経験させることが，「自立の基礎」を築くこととなることが期待されるからである。つまり，こういった学習経験を経ることにより，自ら考えて行動する力や人と関わる力なども育成されることが期待されるのである。

こういった問題解決型の学習を展開するにあたり，学習指導要領の生活科に示された生活科の柱となる，

「ひと」（自分と人や社会とのかかわり）
「生きもの」（自分と自然とのかかわり）
「自分」（自分自身）

という視点を，そのまま年間指導計画の柱に据えて展開することとし，そこから具体的な内容を構想することとした。つまり，生活科を核とする学年カリキュラムを模索することとしたわけである。今年は，生活科と他教科等との関連を内容面で図ることはもちろんのことであるが，特に技能面での関連を図ることを重視することとした。つまり，「基礎的な課題」「基本的な課題」としての技能面での関連を，児童の内的な統合が図られるようなカリキュラム開発を志向したわけである。

上記のような構想を実現するために，2 年生としての学年カリキュラムを新たに作成した（最終頁）。これを見ることからも分かるように，生活科を中核にして，他教科等との関連を図っている。

また，学習課題の内容については，私の修士論文『学びの総合化をめざす学校カリキュラムの開発』において発表した，「学習課題と学習形式によるカリキュラム・マトリクス」に，あらかじめ児童につけたい力を意識した上で記述しておいた。2 年生ということもあり，主に「学習形式」の「１」「２」の部分に関するもののみ（つまり，教師の指示による学習形式が多い）示している。これにより，各教科等を関連させることから児童に身に着けさせたい技能などを意識して取り組むことができると考える。

課題内容 ＼ 学習形式		1	2	3	4
実践的な課題	D				
発展的な課題	C				
基本的な課題	B				
基礎的な課題	A				
		教師の	指示	子どもの	自律

図表１学習課題と学習形式によるカリキュラム・マトリクス（野口 2005）

課題内容 ＼ 学習形式		1	2
実践的な課題	D	・相手の人のことを考えて表現する ・自分たちの学習した経験を活かして，より豊かな生活を創りだす。	
発展的な課題	C	・自分の思いをわかりやすく伝える。 ・友だちと協力して，自分たちの学習をまとめる。 ・ポートフォリオで自分の学習や生活をふり返り，新たな課題を意識する。	
基本的な課題	B	・自分の経験を話したり，書いたりする。 ・友だちの話をしっかりと聞き，自分の考えをもつ ・自分なりのこだわりをもち，それを学習に活かし最後まで追究する。	
基礎的な課題	A	・みんなの前で話す。 ・ノートなどに正しい文字で書く。 ・人の話をしっかりと聞く。 ・準備，片付けを自らする。	
		教師の	指示

こういった学年カリキュラムを支えるために，1 学期より，生活科はもとより，他教科等を含む学級経営全般に，児童の主体的な経験が織り込まれるように配慮してきている。

その一つとして，「朝の会」「帰りの会」などの時間において，「二ユース」などのスピーチを，毎日設定していることがあげられる。これは，国語の「今週のニュース」という単元を発展させたもので，輪番で全員が日々の生活体験について伝え合う活動を経験している。国語で学習した技能面を基礎にして，自らの生活について話し，それを聞く活動は，自分の生活の中の様々な要素に気づき，それを切り取ってくる作業の価値の共有化に繋がると考える。実際に，これを継続して行ってきたことから，児童の中に，日々の生活の諸要素に対する感覚が育ちつつある。伝えたいと思う具体的な経験を掴み取り，それを学級全体のものにしていこうとする態度が顕著になっている。これにより，コミュニケーションを交わす中にも「思い」をこめたものが目立つようになってきている。

もう一つの重要な取組として，「ポートフォリオ」があげられる。本学級では，「ポートフォリオ」は生活科のみならず，国語や算数，図工，道徳など，様々な学習活動の記録を綴じこむようにしている。より正確を期するなら，これらの学習記録を自分の棚に保存して置き，時期がくるとこれらをファイルの中に整理することにしている。その活動の中で自らの学習をふり返り，自己評価・相互評価を合わせて行うことから，新たな自己の課題に気付くことを促すようにしている。それぞれのポートフォリオは，夏休み中には各家庭に持ち帰り，自分の成長を報告する材料としても使用させた。保護者からは，児童向けのメッセージを添えてもらい，そこに自身の 1 学期の評価も合わせて，2 学期の目標を立てている。これにより，児童は，自分の思いや経験を大切にしながらも，それらを対象化し，次なる学習場面においてのより良い判断を促すための具体的な資料としての価値を認識するようになってきている。つまり，自分自身に対する「気付き」を強く意識するようになったと言うことが出来るであろう。児童一人ひとりは，自身の思いを強くもちながらも，それを実行するためにはどうすればいいのか，ということを具体的な思考の流れの中に位置づけてきている。そこでは，教師への依存は減り，むしろ，児童相互の関わりの中で問題解決をしていこうとする態度が見られるようになってきているところである。

これら以外にも，学級内に，「係り活動」を自主的に行うスペースを設けることなどにも取り組んでいる。

こういった活動を学級経営の中に位置づけることは，今後とも継続し，教室環境自体が，児童の学習経験の積み重なった空間となるべく，配慮していくことを考えている。

②本単元設定の理由

こういった学年カリキュラムの中に，今回は遠隔地である，徳島県池田小学校の 2 年生との「交流学習」を核とする単元を設定することにした。

これは，全く見ず知らずの，それも生活の様子などについても不明である，同学年の児童と関わることで，自らの生活の様子について，第 3 者的な視点でふり返ることを期待することから設定されたものである。

以下に，本単元を設定する上で，参照した「学習指導要領」の記述を示した。

◎**学習指導要領　生活科**　で，本単元内容について関連すると思われる記述

第 2　各学年の目標及び内容

〔第 1 学年及び第 2 学年〕

1　目標

（1）　自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などとのかかわりに関心をもち、それらに愛着をもつことができるようにするとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動できるようにする。

（3）身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。

2　内容

（3）自分たちの生活は地域の人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみをもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。

第 3　指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い

1　指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

（1）地域の人々、社会及び自然を生かすとともに、それらを一体的に扱うように学習活動を工夫すること。

（2）自分と地域の人々、社会及び自然とのかかわりが具体的に把握できるような学習活動を行うこととし、校外での活動を積極的に取り入れること。なお、必要に応じて手紙や電話などを用い伝え合う活動についても工夫すること。

（3）具体的な活動や体験を行うに当たっては、身近な幼児や高齢者、障害のある児童生徒など多様な人々と触れ合うことができるようにすること。

(6) 国語、音楽、図画工作など他教科等との関連を図り、指導の効果を高めるようにすること。

つまり，生活科の内容の８項目の中の，（３）を発展的に取り組んでいるものである。遠隔地の学校と交流することから，自分たちの生活についてより一層親しみを感じることが期待される。

また，『小学校学習指導要領解説　生活編』(1999 年　文部省）に示されている，生活科の 10 具体的な視点については，「イ　身近な人々との接し方　――　家族や友達や先生をはじめ，地域の様々な人々と適切に接することが出来るようにする。」「オ　情報と交流　――　様々な手段を適切に使って情報を交わしながら，直接的間接的に相互に交流できるようにする。」を具体化することを念頭において単元設定を行うことにした。

具体的には，児童一人ひとりが，遠隔地の 2 年生と交流することを通して，自らの思い（「どうすればもっと仲良くなれるだろう」）を創出し，それを実現する（「どんな交流をしたらいいだろう」）ために協同的に取り組むことを経験するのが本単元のねらいである。交流の方法としては，1 学期間は，主に手紙を通して行い，2 学期からはインターネットを主たるものにしている。2 年生には感覚としては，捉えがたい「距離感」ではあるが，こういった交流手段をとることにより，身近な存在ではないことが確認されるとともに，それぞれの交流手段の良さや課題などにも気付くことと思われる。そして，そういった特性を活かしながら，質の高い交流を目指すことに，本来的なコミュニケーションの良さにも気付くことにつながっていくと考え，本単元を設定した。

５．活動の流れ

（１）1 学期の学習からの流れ

1 学期の生活科では，「まちたんけん」を学習している。自分たちの生活の場である，唐木田駅近辺の様子について見学することを，グループで話し合って計画し，実際に歩き，多くの人々と出会ってきた。児童は，このときの様子を何枚かのワークシートにまとめ，作文に記述したり，国語の「かんさつ名人」の発展としての「はっけん名人」という文章にしたりすることを行った。さらに，そこで一人ひとりが見つけた情報を出し合い，それを構造的にまとめることも行った。最終的には，お世話になった人々へ，「まちたんけん」で何を発見し，何を学んだのか，ということなどをまとめたお礼の手紙を送ることも行った。

同時期に，道徳の時間に，道徳の副読本の「町のひみつわかったよ」(東京書籍『みんななかよく』P54）によって，「まちたんけん」の様子を遠隔にすむ友達に紹介する内容を学習している。これにより，自分たちの学習した内容を遠隔地の 2 年生へ紹介する意欲へと繋がった。ここから，徳島県池田小学校との交流がスタートすることとなった。

（1 学期の間に展開したこと）

内　　容	具 体 的 な 内 容
1 池田小学校の人に手紙を書いてみる。④	どんなことを伝えたらよいのか，ということを考え，話し合い，それを基にして手紙を書く。また，もらった返事を読み，もっと知りたくなったことなどを話し合い，「暑中見舞い」を書く。
2 掲示板システムを用いて，お互いの生活の様子を伝え合う。	掲示板に，自分たちの生活の様子で，特に今伝えたいことを考え，デジタルカメラで写真を撮り，伝え合う。

（２）2 学期の学習の流れ

（2 学期の展開）全 12 時間

1 テレビ会議で池田小学校の人と話し合ってみよう。②	・テレビ会議システムを用いて，池田小学校の 2 年生と出会い，交流してみる。 ・テレビ会議システムの良さ（遠隔であっても顔を見たり，声を聞いたりすることができる）と難しさ（カメラのフレームに入らないと見えない，マイクを通さないと聞こえない）などを感じる。
2 どんなことを紹介しあうのか，内容や方法を考え，計画してみよう。②	・自分たちの「まち」の様子や「人」などについて，1 学期の学習をふり返り，そこから伝える内容を考える。 ・テレビ会議を使って伝えるために，どんな方法が良いのかを考えて見る。 （「クイズ番組」の形式を考えている）
3 紹介するための準備をしよう。④	・登場してもらう人（ゲスト）に交渉する（手紙を書く）。 ・紹介する方法を考え，準備する。 ・ゲストの方のお店を訪問し，質問する。 ・ゲストへの感謝の言葉などを考える。 ・リハーサルする。
4 **テレビ会議で紹介し合おう。（本時）①**	**・ゲストを招き，その人のことについて池田小学校へ紹介する。** **・招いた人への感謝の言葉などを伝える。**
①	**・池田小の人たちから，まちの人を紹介してもらう。**
5 振り返ってみよう。②	・遠くにいる友だちと出会ったことの良さを感じる。 ・相手の存在や気持ちを考えて伝えることの良さを感じる。 ・友だちと協力して「会」を作り上げたことの良さを感じる。 ・ゲストの方へお礼の手紙を書く。

６．本時の展開（10/12 時間）

（１）本時のねらい

・池田小学校の人たちに，自分たちが招いたゲストの方のことをしっかりと伝えようとする願いをもち，友達と協力し合いながらそれを実現するために活動する。

時	○学習活動　　・期待する児童の姿	□教師の支援 ■評価の観点
10 分	**導入** ○ゲストの方とあいさつをする。池田小学校の人との交流の内容を確認する。 ・グループで協力し合いながら，自分たちの言葉の練習をする。	□児童に元気良く挨拶をさせ，気持ちを盛り上げる。 □本時のねらいを確認する。
25 分	**池田小学校との交流学習を始める。** ○池田小学校とあいさつを交換する。 ○大松台小学校から，「まちたんけん」でお世話になった方をゲストで招いたことを伝え，このゲストがどんな仕事をしている人かを考えてもらう「クイズ」を出題することを説明する。 （6 グループから一つずつ，計六つのヒントを出題する） ・カメラを見て，わかりやすくヒントを伝えようとする。 ・友達と協力し合いながら，工夫したヒントを言う。 （３分間回線を切断し，お互いに考えあう） ⇒池田小学校から回答をもらう（6 グループから）。 ○池田小学校に正解を伝える。 ・正解があれば拍手などを送る。 ○ゲストの方に，6 グループから質問をし，それに答えてもらう。 ・ゲストの方と心を通わせながら尋ねる。 ・池田小学校の人に伝えようとする気持ちをもつ。 ○ゲストの方から両校の児童へメッセージをいただく。 **⇒交流を終了する。**	□池田小学校との交流の全体司会を行い，学習をリードする。 □児童の活動を，ハード面を操作することで支える。 ■池田小学校の人たちの気持ちを想像しながらヒントを出すことが出来ているか。 ■ゲストの方に的確な質問をすることが出来ているか。 □ゲストの方の話を聞く雰囲気を作る。
10 分	**まとめ** ○本時の学習をふり返る。 ・池田小学校との交流したことの良さを感じている。 ・伝えたかったことを伝えることのできた喜びを感じている。 ○ゲストの方へ，お礼の言葉を伝える。 ・感謝の気持ちをもっている。	□池田小学校との交流が出来たことの喜びを実感させる。 □ゲストの方への感謝の気持ちをもたせる。 ■ゲストへの感謝の気持ちをもっているか。

平成 17 年度　大松台小学校２年生　年間指導計画〔学年カリキュラム〕

学年目標・友だちの考えや思いをしっかり受け止めて聞く子・自分や友だちのことを考えて行動する子・自分のめあてを立てて元気に活動する子

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	・ふきのとう ・今週のニュース ・たんぽぽのちえ	・かん字のひろば① ・かんさつ名人になろう ・ともこさんはどこかな	・同じふぶんをもつかん字 ・かん字の書きじゅん ・スイミー	・かん字のひろば② ・もうすぐ夏休み ・丸、点、かぎ ポートフォリオ	・おおきくなあれ ・あったらいいなこんなもの ・お手紙	・サンゴの海の生きものたち ・かん字のひろば③ ・カンジーはかせの大はつめい	・何がどうした ・かん字の読み方 ・見たこと、かんじたこと ・お話がいっぱい ・こんなお話を考え	・かたかなで書くことば ・一本の木 ・かん字の広場④	・いるか ・何に見えるかな ・ことばであそぼう	・音やようすをあらわすことば ・なかまのことばとかん字 ・楽しかったよ、二年	・かん字の広場⑤ ・スーホの白い馬
算数	・時計とひょうやグラフ ・何十の計算 ・たし算のひっ算	・ひき算のひっ算	・長さのたんい ・どんな計算になるのかな ・3けたの数	・ふくしゅう	・計算のくふう ・たし算とひき算のひっ算 ・形づくり	・かけ算(1)	・九九ビンゴ ・かけ算(2)	・ふくしゅう	・三角形と四角形	・4けたの数 ・長いもの長さのたんい ・たし算とひき算	・春がきた ・2年生のふくしゅう ・
生活	・1年生に学校をおしえてあげよう ・春をさがそう (8)	・野菜を育てよう ・生きものとふれあおう ・町をたんけんしよう (10)	・遠くの友だちと知り合おう (10)	(7)	(8)	・みんなでつくろうフェスティバル (11)	(11)	わたしとかぞく (8)	・大きくなったね		・6年生を送ろう (8)
音楽	・音楽ランドへしゅっぱつ	・リズムランドのたけん	・がっきランドのたんけん		・からだで音楽	・音と音をあわせると	・音のたんけん		・音楽でおはなし	・たのしい音楽会	
図工	・たのしいな ・春のえをかこう (5)	・切って開くと ・ザラザラフワフワ (7)	・ヌルヌルヒヤヒヤ ・ねんどでそっくりに (7)	・きょうかしょびじゅつかん 【あつめてかざってたからもの】 (5)	・どんどんできるよ ・かたおしかたぬき　(6)	・ひかりのおくりものざいりょうのへんしん ・タワッシー　(8)	・ウキウキウッキー ・見てみておはなし (6)	・見て見ておはなし　・おしゃれなどうぶつ(6)	・きってワクワクめくルンルン　めくるとなあに ・うつしてうつして (6)	・うつしてうつして ・ピョコピョコストローマジック (8)	・線をひきながらおもいついたことをえにかく ・かみのしくみをつかってつくる (6)
体育	・うんてい、のぼりぼう ・かけっこ ・ボール (9)	・てつぼう ・うんどう会の練習 ・もぼうあそび (14)	・ボールゲーム ・平均台 (9)	・水遊び (6)	・とびばこ ・マット ・なわとび (7)	・てつぼう ・ドッジボール ・なわとび ・マット (8)	・とび箱 ・ドッジボール (8)	・おにあそび ・なわとび ・いろいろな走・跳 (5)	・なわとび ・おにあそび (7)	・まとあてゲーム ・いろいろな走・跳 (10)	・マット ・ボールゲーム (7)
道徳	・礼儀 ・規則の尊重 (2)	・家庭愛 ・尊敬・感謝 ・動植物愛護 (3)	・思いやり・親切 ・節度・節制 (3)	・誠実・明朗 ・生命の尊重 ・反省 (3)	・勇気 ・節度・節制 ・礼儀 (3)	・信頼・友情 ・勤勉・努力 ・生命の尊重 ・勇気 (4)	・思いやり・親切 ・敬けん ・規則の尊重 ・希望　(4)	・信頼・友情 ・節度・節制 ・勤勉・努力 (3)	・尊敬・感謝 ・愛校心 ・信頼・友情 (3)	・誠実・明朗 ・勇気 ・思いやり・親切 ・希望　(4)	・公徳心 ・尊敬・感謝 ・郷土愛 (3)
学活	・2年生になって ・きまり (3)	・助け合って仕事をしよう ・楽しい運動会 (2)	・雨の日の遊び ・よい歯と虫歯 ・読書週間 ・安全を考えよう (3)	・整理整頓 ・楽しい夏休み (3)	・2学期のめあて ・学習時の態度 (3)	・目を大切に ・大切な体 ・清掃用具の使い方 (4)	・展覧会の参加 ・ことばづかい (4)	・楽しい冬休み ・ストーブの使い方 (3)	・読書週間 ・新年のめあて ・外であそぼう (3)	・友だちを大切に ・あとかたずけ (4)	・感謝の心 ・もうすぐ3年生 ・春休みの過ごし方 (3)
行事	6日　入学式 21日　遠足 (小山田緑地)	28日　運動会	17日交通安全教室	20日　終業式	1日　始業式 1日総合防災訓練	21日　全校遠足	4･5日　展覧会	22日　終業式	10日　始業式		23日　修了式